

暗殺教室 白緑の2人

two—on

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

櫛ヶ丘中学校3年E組。通称“エンドのE組”。そこでは、本校舎の人達や先生達にからかわれたり、E組だけに罰を与えたりなどの差別を受けているクラス。元A組の雪羅と瑠亜がE組へ行くことになった。絶望している中、防衛省から月を破壊した生物を殺して欲しいと言われ、絶望教室から暗殺教室へと変わった。

目次

1.	超生物の時間	1
2.	暗殺の時間	5
3.	説教の時間	9
4.	集会の時間	14

1. 超生物の時間

「僕達は中学3年に進学した。中学生生活最後の時期だ。しかし、僕達は絶望でしかなかった。何故かって？僕達は最底辺（E組）に落とされたんだ。」

朝、何事もなかったかのように学校へ登校した。途中、本校の人達に会ったが、軽蔑の言葉しか交わされなかった。傷つくなあ……

柵ヶ丘中学校本校を通り過ぎ、山を登った。

登り終えると、古びた山小屋の様な建物があった。ここが僕達の学校『柵ヶ丘中学校E組』通称『エンドのE組』。教室に入り、小説を読んでいた。すると、後ろから肩を叩かれた。振り向くと、僕の頬に指が刺さった。

「……………肌乾燥してるからやめてほしんだけど」

「いや女子か」

瑠亜が笑いながらツツコミを入れた。コイツは小学生の頃からの親友だ。僕の髪は白色で、いじめられていた。そんな時助けてくれたのが瑠亜だった。

「雪羅は高校どこ行くんだ？」

「まだ一学期だけでも。瑠亜はもう決めてるの？」

「いや、全然」

なら聞くなよ。そう思っていると、クラスメイトの人たちが絶望した表情でゾロゾロと教室に入ってきた。わあ、みんな怖しい。その表情を見て瑠亜は

「まあ、普通はそうなるよな」

と苦笑いしながら言った。ん？なんでこんなに落ち着いてるのかって？そりやもちろん落ち込んで入るけどね。正直言つてあそこ堅苦しいから嫌いなんだよね。

しばらく時間が経つと、男の人が入ってきた。誰？この人。

「俺は防衛省の鳥間だ。単刀直入に言う。君達にある生物を殺してほしい」

鳥間という人がそう言うが、みんなポカンとしていた。そりやそうでしょ。いきなり来ていきなり殺せとか。みんなが唖然としていることに気づいたのか説明を入れてきた。長つたらしい話だったが、要約すると、『月を破壊した超生物がここ3年E組の担任をすることになるから僕達の手で3月以内に殺せれば賞金100億をプレゼント』と言うことだ。いや、この歳で殺人とか嫌なんだけど。普通に殺し屋に頼んでくださいよ。

「今からその超生物を見せる。こい」

鳥間さんがそう言うと、黄色いタコの様なのが入ってきた。何あれ？

「コイツが月を破壊した生物だ。コイツの移動速度はマツハ20。実弾やナイフは効かない……というより擦りもしない」

そう言い鳥間さんがナイフを振ったが、確かに擦りもしなかった。早っ……

「しかし、防衛省が開発したこの拳銃とナイフを使えばダメージを与えることができる」
そう言うと、超生物が自分の触手に向かって拳銃を発砲した。すると、触手は千切れ、床でまるで釣り上げられた魚の様にピチピチ跳ねていた。

「この様になります……まあ、すぐ再生しますけどね」

超生物がそう言うと千切れたところに新しい触手が生えてきた。すごっ……

「私はある人との約束でこの教室にきました……皆さんには期待してますよ。殺せる
いいですね……卒業までに……ヌルフッフ」

そう笑いながら言った。

キヤラ説明

柊 雪羅（ひいらぎ ゆら）

身長：170 cm

性格：穏やかで鈍感。怒るとめっちゃ怖い。

容姿：金木が改名したと思ってください。白髪。

神崎 瑠亜（かんざき るあ）

身長：171cm

性格：悪戯好き。ドS。

容姿：痩せ型の薄い緑髪。

2. 暗殺の時間

朝、瑠亜と一緒に登校していた。学校に着き、教室に入ると、殺せんせーがいた。ちなみに、殺せんせーとは殺せない先生の略である。

「おはようございませす。殺せんせー」

「にゅや、柊君に神崎君。おはようございませす」

何事もなかったかのように挨拶をした。通り過ぎる時にナイフで斬ろうとしたが、元にはナイフがなかった。殺せんせーを見ると、ニヤニヤしながら紙にナイフを包んでいた。見えなかったぞ。

クラス全員が揃い、ホームルームを始めた。

「起立」

日直がそう言うと、みんな椅子をしまい、立ち上がった。

「注目」

今度は、手に持っていた銃を殺せんせーに向けた。

「礼」

そう言うと、手に持っていた銃を一斉に発砲した。

「そのままでもいいので出席をとります。磯貝君」

「はいっ！」

発砲したまま名前を呼ばれ、僕達はそれに返事した。5分くらい経つと、みんなが発砲するのをやめた。

「今日も命中弾はゼロ……皆さんもまだまだですねぇ……ヌルフッフ」

顔をシマシマにしながら言った。腹立つなあ。

「なあ雪羅。俺卒業までに殺せる自信がないんだけど」

「あははは……それは僕も思ったよ……」

瑠亜の言葉に苦笑いするしかなかった。だって当たらないんだもん。

「さて、1時間目は数学でしたね。皆さん準備してください」

はいいと返事をした。水を飲もうと水道に向かうと、渚君が寺坂君達に呼ばれた。暗殺の計画でも立ててるのかな？そうこう思っていると、1時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

昼休み。瑠亜と話していると、渚君が暗い表情をしていた。

「どうかしたか？」

瑠亜が気にして声をかけた。しかし、渚君は

「なんでもないよ」と言っただけで何処かへ行ってしまった。何があったのだろうか。

5時間目。僕は眠気と戦いながら国語の授業を受けていた。

「それでは、今から皆さんに短歌を描いてもらいます。できた人から見せに来てください」

そう言うと、みんなに縦に長い紙を渡した。

しばらくすると、渚君が席を立った。

「にゅやーもうできたのですか?」

渚君が先生の元へ歩いて行つた。しかし、渚君の紙には何も書いていなかった。紙の裏にナイフを隠し持っていた。先生の元に着くと、渚君は殺せんせーを刺そうとしたが、難なく腕を掴まれて無力化された。

「言つたでしょ……もつと工夫して殺しに来なさいと」

そう言うと、渚君が先生に抱きついた。まあ大胆。

「おい!待てっ!」

瑠亜が立ち上がった瞬間、渚君と先生の間で何かが発火した。

「よっしやあ!100億ゲツト!」

そう言い寺坂君が叫んだ。何これ?みんなが渚君の元に駆け寄つた。

「寺坂君、これは一体どう言うことなの?」

「あ?おもちゃの手榴弾の中に火薬と弾を入れて爆破させたんだよ」

「渚君を利用して?」

さつきから雪羅の機嫌が悪くなっている。どうやら、寺坂君達の行動が気に入らなかつたらしい。それもそのはず。雪羅は仲間を見捨てる奴は許さないからな。俺も渚の元へ向かうと、渚は透明な何かに包まれていた。何だこれ?

「実は先生、月に一回脱皮をします。この皮は手榴弾の爆風を防ぐこのなど容易いことです」

上を見上げると殺せんせーがいた。しかし、顔の色はいつもの黄色ではなく

「ところで……」

見るまでもなく

「寺坂、村松、吉田……首謀者は君達だな?」

真っ黒だった。

3. 説教の時間

真つ黒になった先生は怖かった。女子の数名が涙目になっていた。

「君達は少し度が過ぎたようですね」

先生は少しずつ寺坂達に近づいて行つた。その間に雪羅が割り込み、寺坂の胸ぐらを掴んで平手打ちした。

「お前ら………何やったかわかつてるの？」

雪羅は完全にキレていた。それを見た殺せんせーは焦っていた。自分の良いところを持つてかれたからな。

「何でこんなことをしたの？」

「し、知らねえよ。俺たちは関係ない！」

「関係ないわけないよ。さつき自分で手榴弾の説明してたじゃん」

雪羅がそう言うと、寺坂達は何も言わなくなった。気が済んだのか、雪羅は手を離し、渚の元へ行つた。

「大丈夫？」

「うん……………大丈夫」

そこに殺せんせーが寄ってきた。そして、渚君の肩を叩いた。

「渚君、先程の行動。満点です！殺気を立たせずに近寄ってこれるなんて凄いですねえ

…しかし

殺せんせーは寺坂君達に顔を向けた。

「あなた達は渚君を」

次に渚君に顔を向け

「渚君は自分を大切にしなかった。そんな人に暗殺する資格はありません」

そう言うとき殺せんせーは授業を再開した。

「なあ、雪羅」

「うん……………あまりにも酷かったからつい……………」

「久しぶりにお前がキレたの見たわ」

瑠亜が笑いながら言った。やかましい。

放課後、僕は殺せんせーに呼ばれた。何かしでかしたかな？

「失礼します」

「こんにちは柊君。君を呼んだのは少しお話がしたいからです」

「そう言い、殺せんせーがタピオカミルクティーを机の上に置いた。

「話ってなんですか？」

「渚君の暗殺……どう思いましたか？」

「…………一言で言うとうるさかったです。自分が犠牲になるとわかっているのに恐怖すら感じなかった。渚君には多分……素質があるんだと思います」

「そう……渚君には自分を犠牲にする暗殺の素質があります。しかし、それは間違っています。自分を犠牲にする暗殺者などプロとは言えません」

「そう言い、殺せんせーはタピオカミルクティーを飲み干した。

「…………でも、なんで僕に話したんですか？」

「君も同じ『目』をしていたからですよ」

「そう言い僕を手入れし始めた。

「さつきは渚君が誘われていましたが、あれが終君だった場合受け入れていたでしょう。先生としては危険なことをして欲しくありません」

「手入れし終わり、触手が頭から離れた。鏡を見ると、七三分けされた僕が映っていた。

「……………何ですかこれ？」

「ちよつと遊んでみました」

「ニヤニヤしながら殺せんせーが言った。少し苛立ったのでナイフを投げた……………」が、

当たるとは無く、床に落ちた。

「無闇に撃つては標的には当たりませんよ。しっかり狙いを定めなければ」

そう言い、僕の額に銃口をくつつけた。

「……………話は終わりですか？」

「ええ、もう良いですよ」

僕は椅子から立ち上がり、殺せんせーに『さよなら』と一言言つて帰った。

校舎を出ると、倉橋さんがいた。

「どうしたんですか？もう5時ですけど」

「あ！雪羅君！ちよつと自習しててね。気付いたらこんな時間だったんだ」

そう言い笑顔で答えた。可愛い。

「もう遅いですし、送りますよ」

「ほんと？じゃあ、お言葉に甘えて」

夜の山はとても暗かったが、スマホのおかげで足元が見やすかった。スマホを作った人に感謝だな。

「そういえば、何で雪羅君はあんな遅くまで学校にいたの？」

「殺せんせーと話をしたんですよ。なんか、渚君と僕は似てるって言われて……………」

さつきまでの殺せんせーとの会話の内容を全て倉橋さんに話した。

「雪羅君は優しいからいつかしそうだよね」

苦笑いしながら倉橋さんが言った。僕ってそんなもんなの？しばらくすると倉橋さんの家に着いた。

「じゃあまた明日ね！」

「はい、さようなら」

手を振り返しながら自分の家へ帰った。

4. 集会の時間

登校中、ナンパの現場を目撃した。あれは柵ヶ丘の制服か。ていうか倉橋さんだな。
「やめて！話して！」

「E組は頭の悪い奴らばっかりだけど顔が整った奴がいて良いなあ」

そう言い、胸に手をかけようとしたので手首を握った。

「何すんだよ！」

「嫌がつてるんだから辞めてあげたら？人間としてどうかと思うけど」

「お前もE組のやつか？俺が誰だかわかってるのか？俺はA組の生徒だぞ！」

何だろう。ものすごくウザい。殴っちゃダメですか？そう思い、軽く握った。

「痛い痛い痛い痛い！わかった！悪かった！俺が悪かったから！」

反省したらしいので手を離すと、握っていたところが青く変色していた。ナンパ野郎は泣きながら走って行った。

「はあ………大丈夫ですか？倉橋さん」

「うん、助けてくれてありがとう！」

そう言うのと倉橋さんは満面の笑みを浮かべた。

「せっかくだから一緒に学校行こうよ」

「……………じゃあ、お言葉に甘えて」

そう言い一緒に山へ登った。

登ってる途中、瑠亜と神崎さんに会った。

「おはよう瑠亜、神崎さん」

「おはー……………朝からイチャイチャしちやっつて」

瑠亜がニヤニヤしながらそう言うのと倉橋さんが顔を赤くした。さっきの会話中に赤面する要素あった？

「珍しいね。神崎さんと瑠亜と一緒に登校なんて」

「ああ、神崎がナンパされてたからな。助けたついでに一緒に行こうってなった」

「へえ、僕達と同じだね」

倉橋さんの方に目をやると、神崎さんと一緒に顔を赤くしていた。風邪でも引いたの？

学校に着くと校庭にみんなが並んでいた。今日は確か全校集会か。面倒臭い。せっか

く登ってきたのに降りるなんて……最悪だ。山を降っている途中、倉橋さんが足を引
きずっていた。

「大丈夫ですか？」

「うん、ちよつと足挫いちゃって……気にしないで先行つて。ペナルティ付いちゃうよ」

そんな作り笑顔で言われてもな…仕方ない。

「ちよつと我慢しててください」

そう言い、倉橋さんをお姫様抱っこした。

「ふえ／＼?!雪羅君／＼?!」

倉橋さんは顔を赤くしながら口をぱくぱくしていた。

「舌噛まないようにしてくださいね!」

そう言い走って山を下った。少しすると、黄色い何が僕の横を走っていた。

「おやおや、これはどう言う状況なのでしょう?」

殺せんせーが顔を薄ピンクにしてニヤニヤしていた。

「倉橋さんが足を挫いちゃったので保健室まで連れて行きます」

走りながら喋るとすぐ疲れるって聞くけど、本当なんだね。2割疲れたよ。しばらくすると、本校舎が見えてきた。そのまま保健室に直行した。

保健室に着いたが、先生がいなかった。

「……仕方ないか。倉橋さん、ちよつと足見せてください」

「う、うん……／＼」

そう言い倉橋さんは顔を赤くしながら靴下を脱いだ。なんでそんなに顔赤くするの？ 怪我したところを見ると腫れていた。

「腫れてますね……とりあえずシツプ貼って包帯撒きますね」

慣れた手つきで手当てをした。何で慣れてるかって？ 散々自分にしてきたからね。服脱いだら身体中傷だらけだよ……虐待じゃないからね？

「よし、これで大丈夫ですかね」

手当てが終わると、倉橋さんは立ち上がってみた。

「痛みはありませんか？」

「うん！ 大丈夫みたい！ ありがとうね！」

「どういたしまして」

無意識に頭を撫でた。

「ふえっ?!／＼／＼ゆゆゆゆ雪羅君?!／＼／＼」

顔を真っ赤に染めて倉橋さんが驚いていた。可愛い。てか、そんなに驚かれることし

たかな? まだ歩けなそうだったので、お姫様抱っこして体育館まで行った。その間、倉橋さんはずっと顔を赤くしていた。

「皆さんは全国から選ばれたエリートです! この校長が保証します! 気を抜いていると……どつかの誰かさん達みたいになっちゃいますよ!」

ハゲが言うともんな笑いだした。迷惑考えろよ。

「皆さんは笑いすぎですよ。先生も言いすぎました」

しばらく馬鹿にされると、今度は生徒委員の発表が始まった。紙を配られていたが、僕達の元にはこなかった。

「あの! E組の分がないんですけど!」

磯貝君が言うのと、メガネは笑いながら

「あつれえ? おかしいなあ。ごめんなさーい! E組の分忘れちゃったので覚えて帰ってくださいーい!」

わざとらしい。イライラしつつも平然とした表情を装っている。僕のイライラつきに気づいたのか、瑠亜が僕の肩を押さえた。そして小声で

『落ち着け雪羅! イライつくのはわかるから! あのメガネと笑ってくる虫達がうざいのはわかってるから!』

最後の方は大声で言った。わざとだろお前。

すると、手元に紙があつたのに気づいた。そこには《生徒委員からのお知らせ》と書いてあつた。横に目をやると、変装した殺せんせーがいた。

「問題ないようですね。先生が『手書き』の印刷を渡したので」

殺せんせーが磯貝君に言うのと、磯貝君がメガネに言った。するとメガネは

「誰だよ！笑いどころ潰したやつ！あつ、いえ……ゴホン！」

咳払いをして話を進めた。関係のない話をするが、僕の手にはレコーダーがある。これ何をするかつて？世間に出したら彼らの価値は下がるだろうなあ……考えただけでニヤニヤしてしまう。

なんだかんだで集会が終わつた。途中、ビッチ先生が殺せんせーを刺してたが、鳥間先生に連れて行かれたので笑つた。集会中に笑うのは迷惑だつて？なら他の組の奴らにも言つてくれ。

「雪羅、俺自販機でジュース買うから先行つててくれ」

「わかつた………歩けそうですか？」

雪羅が倉橋の足を見ながら言った。

「えつと………もしかしてまた………？」

「その状態で無理はさせられないです」

雪羅がそう言うのと、倉橋は顔を赤くしながら「お願いします」と言った。

自販機でジュースを買い、校舎へ戻ろうとすると、渚がD組の生徒2人に絡まれていた。他所から見ると、小柄のツインテールの女子がナンパされてるように見えた。距離が遠いせいで会話の内容は聞こえなかった。しかし、渚が何か言った瞬間、2人は怯えていた……渚の放つ殺気に対して。用が済んだのか、渚がこちらに向かってきた。

「あれ？瑠亜君まだいたんだ」

「おう、自販機でジュース買ってた……さっき何言われたんだ？」

買ったジュースを飲みながら聞いた。

「なんか……E組のくせに調子乗ってるんじゃないかねーとか。あと殺すとかかな」

「おう、なんとなくわかった」

それ以上聞くとなんか怖いので話を強制的にやめさせた。この子、見た目のわりにめちゃ怖いよ。

教室に戻ると、顔を真っ赤にした倉橋とその倉橋に質問攻めするみんなとなんでこん

な状況になっているのかわかってない雪羅がいた。